

編集室から

「つぶやき」に書いた先月の視察研修には、実はもう一箇所、熊本県人吉市がありました。

「ひまわり亭」の本田節さんと、7・8月号に寄稿を頂いた杉末さん、前回もお世話になった農家民謡「古時香」の深水さんご夫妻を、塾生と一緒に訪ねました。本田さんも全国区の方で多忙を極めておられるにも拘らず、我々をご案内頂き、夜なべ談義にも遅くまでお付き合いいただきました。都会から人吉に惹かれ、ひまわり亭で「修行」されている田舎暮らし隊の若き三人も加わり、深水さんの手料理に夜なべ談義も熱く深まって行きました。

石川は「おもてなし」文化が色濃い土地柄ではありますが、中々どうして人吉の方々からのご歓待には、すっかり心が融けるが如しです。全国から「まれびと(旅人)」をお迎えする事が多いのですが、人吉の皆様の方に触れて、改めて遠来からわざわざお越しくださる方をお迎えする心、出逢いを待ちわび・愉しむ心に思いを致しました。初対面の研修参加者の心にも印象深く刻まれたことでしょう。

「迎え入れる」と申します。それは、お迎えするだけでは無いようです。遠来の方の心・思いを、こちらの心にも受け入れる。そうして始めて通じ合い、共感・共鳴し始めるものがありそうです。出逢い、そして原点に立ち返る気付きを頂く。交流の真髄の一つです。

地域づくり人は、初対面でも旧来の朋のような人々ばかりです。人吉に親戚ができた気であると「三度来なければ親戚にはならないからね」と本田さんから釘を刺されました。姉のような本田さん、長男と同年の杉松さんとその仲間たち、そして本当の叔父・叔母のような深水さんご夫妻。北九州に母の里があり、両親が出逢った南九州という土地に、思いを通わせる路がまた、拡がりました。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていたければと考えて編集しています。



2010/10
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2010/10
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

神意月



上高地にて
by hama

寄稿 『有頂天才ヤジの長崎夏滞在記』

コンサルティング・シオン 代表 川口 整

今年の夏は全国誰もが暑かった。今夏の有頂天才ヤジは、帰省した長崎で暑さのなか熱く燃えていた。市内で一人暮らし八十七歳の母と寝食を共にした。母は年相応のボケがある。わたしは、母に「ごたごた文句をいうバカ息子だ。毎日、二人分三度の食事を作りながら、「台所が熱い」と叫ぶ。「うるさか」と母はいう。午後三時過ぎベタ風になる。体がベタベタだ。たまらず「クーラーを入れよう」と要求。「もつたいなか、×」と母がいう。三日目にキレた。「クーラーがあるのに使わんほうが、もつたいなかやろうが！」と弱者の母に面と向かってカット怒った。「おふくろごめん」カレー鍋に頭を下げた。

毎年八月の市内は、防災用のサイレンが三度も町内に響きわたる。「広島原爆の日」、「長崎原爆の日」、「終戦記念日」。サイレンの響きは、命あるもの地球平和と世界の人々の幸福がユニティーされた念願だ。原爆投下の時刻、長崎県庁の一室で仕事していた閃光を免れた母と二人で、黙禱を捧げる。母は合わせる手が震え、目頭が赤くなっていた。原爆二世といえども、現地へ来なければ、母の記憶も合わせ被爆者の存在さえ風化させることになる。アラ還になってようやく気づいた。九日、被爆六十五周年長崎原爆犠牲者慰霊平和式典を営んだ。夜は、原爆投下直後、焼け爛れた多くの市民が、水を求めて飛び込み亡くなった浦上川で、千二百個の万灯が原爆被爆者の冥福と恒久

平和の願いをこめて流された。一日中長崎は哀しみに覆われる。有頂天才ヤジの心に核廃絶が浮かんだ。

初盆（はつぼん）を迎えた家は、墓前に提灯を立て、爆竹や矢びや花火で賑やかに故人を偲ぶのが長崎流である。終戦記念日と重なる十五日は、夕方から精霊船三千五百四十三隻が市の中にくり出した。百連発爆竹やドラの音を鳴り響かせる。歌手さだ家の一隻も賑わった。精霊船に家紋入り送り提灯が飾られる。ゆらぐ明かりはどことなく寂しげな風情だ。担ぎ手の「チャンコン・チャンコン・ドイ・ドイ」低くど太い掛け声は、故人と別れるもの悲しげな儀式に映る。有頂天才ヤジは、三年前に逝った親父のことを思いだし、合掌する。

長崎夏の行事が終わり、秋が訪れる。「まだだ!？」まちなかの坂道を坂本龍馬が駆ける。観光客が駆ける。丸山、龜山社中が熱く燃えている。坂本龍馬で賑わっている。週明け不肖にも母一人残し、有頂天才ヤジは賑わうまちなかを後にして、熱く燃えた長崎を離れる。この先、おふくろの生活をどう支えるのか、平和と被爆者の声を合わせどう代弁していくのか、また長崎文化継承にどうかかわるのか。長崎滞在の一ヶ月間は、すべてはこれからじまることに気づかされた。

平成二十二年八月二十日記



【プロフィール】
（かわぐちただし）
働く人々の意識改革エキスパート。セミナー講師・作家。

濱のつばやき 『やねだん』

先月、コーディネータを仰せつかっている石川県地域づくり協会の研修事業で、南九州へ視察させていただいた。視察先の一つ、鹿児島県鹿屋市柳谷集落、通称やねだんは「行政に頼らない集落づくり」を掲げ、いくつもの集落営事業を元に、自主財源を確保。ついには住民に「ボーナス」を支給するに至り、全国に知られている。事前に、地元放送局が制作した番組ビデオを拝見したり、ホームページを調べて予習をしていたが、やはり現場を訪ねキーマンに直接お話を伺うに勝るものは無い。その内容への驚きと取り組み姿勢に思う処、考えさせられる処があまりに大きく、視察後のこの一週間は、一時も頭から離れなかった。

この二十一年間、田舎の再生に取り組み続けてきた自分なりに分析を試みたのだが、中々整理がつかなかった。その理由は、自らの生き方に対して相当厳しく突かれた点があるからだ、と漸く気づいた処で、視界が晴れた。「やねだん」の活動は、当時五十五歳だった豊重さんを、集落が大抜擢して公民館長就任を依頼したことから始まる。氏が取り組んだことの仔細は別に譲りたい。その成果の目覚しきの源泉は、どうやら次の二点に凝縮されている。一つは、経済の正視、もう一つはリーダーの覚悟。

前者は、活動成果をデジタル化・見える化し、かつ経済的にも判りやすくさせる。集落のヒット商品「土着菌」の着眼点には、脱帽である。

もつと重要なのは、後者であった。地域づくり・村おこしの成否は、集落内の合意形成とやる気の発露に尽きる。これは命令形では絶対に無理だと氏は指摘する。では、お願いの形をとったのか？答えはノー。氏は、住民一人一人を感動させる事以ってそれを為した。特に反目者に対しては、子や孫に尽くすこと等で反意を融かしていく。人は感動共感によってのみ、動かされる。この事を氏ほど深く理解し、実践し続けてきたリーダーはいないのかも知れない。氏がメインを務める「やねだん」の故郷創世塾には、総務省・財務省・農林省の本省局長クラスも個人参加するという。一集落の私塾としては異例なことである。

個人的な志向から三面記事には興味が無い。故に三面記事的な話題を見下してきた。だがそこにこそ人々の感動・共感を生む鍵が隠されているとは全く気づかなかつた。氏は、住民一人一人を考え続けてきたという。

無明の人を見下すのではなく、反目者に反発するのでなく、共に愛せるか？どうやってその事を伝えるのか？氏の背中是我々に問いかけていた。意識せず、自在・随意になせる事が理想ではある。が、そこに至るのは、瞬間瞬間にも意識を働かせ、隙無く完璧に為せるようになった後のことではないか。氏はそれを実践している。

人を変えようとしても無理だ。まず自分が変わらねば何も始まらない。リーダーという役目の内実は、自らの内にある安っぽい正義感・道徳観、そしてプライドとの熾烈な戦いを克服する事なのである。

僅か半日の視察でこの事を伝えてくださった「やねだん」の豊重館長に改めて、深く御礼を申し上げます。

今回は37号からだいぶ空いたが、「東北新幹線青森開業に向けて(4)」をお届けする。2010年12月4日に東北新幹線八戸～新青森駅間の開業が決まり、この9月にダイヤや料金もJRから発表された。まちには何ヶ所か新幹線車両のパネルと「あと 日」という表示が見られ、「一路青森」をキャッチフレーズとし、カウントダウンに入ったと実感する。

新幹線の開業は、当然にプラスとマイナスの両面をもたらすが、今回は中心市街地の駅と郊外の新幹線駅という点から述べてみる。

新幹線の新青森駅は、奥羽本線で青森駅から3.9km、普通列車で5分という青森市西部の郊外に位置している。在来線の駅として1986年に開業し、現在は無人駅である。

青森駅正面(東口)に中心商店街である新町商店街と中心商業地域が広がっている。青森市は、2年ほど前まで富山市と並び中心市街地活性化の優等生のように扱われ、全国各地からの視察や中心市街地活性化に関する学会の開催などが相次いだ。代表的なものとしては、この「きただより2号」にも掲載した「複合施設アウガ」の開設があげられる。前青森市長が日本でははじめて「コンパクトシティ」を掲げ中心市街地活性化に取り組んできたが、残念ながら中心商業地域の地盤沈下はとまらない。青森市では新幹線開業にあわせ、新幹線が停車しない青森駅前も駅前広場の改造(バス・タクシープール、バス会社と市の観光案内所など)、ねぶたを常設展示する「ねぶたの家 ワ・ラッセ」の開設(2011年1月開館予定)など、駅前の利便性や集客力の向上に取り組んでいる。これは市の方向として、「青森駅を中心としたまちづくり」を掲げ、先にあげたコンパクトシティのコンセプトから過度な郊外への拡大政策をとらない政策の一環である。一方、「新青森駅周辺整備計画」の土地利用計画については、以下枠内のようになっており、商業系を極力、抑制しようという方向が示されている。

1. 東口駅前広場周辺は、観光客やビジネス客の利便性を考慮し、中心市街地と競合しない程度の商業、宿泊施設及び広域からの集客が期待できる施設の配置、誘導を図る。
2. 西口駐車場周辺は、地区や周辺住民の利便に供する施設及び交通の利便性を生かした集合住宅などの配置、誘導を図る。

人口が約30万人の青森市において、2つの交通ターミナル駅の誕生した時に、在来線を中心とした住民の日常生活の利用と観光客の利用という人の流れがどう変化するのか、中心市街地の駅と新幹線駅による郊外の駅が並び立っていけるのか。青森市固有の問題であるとともに、今後、青森市と同規模程度の地方都市の都市構造を考えていくうえでも重要な例となっていくと思われる。

相続について22

二世帯住宅を守る場合

今回のケースは、二世帯住宅に住んでいるご家族に相続が発生した場合です。

Case Study

山口さん(仮名)は、父親が所有していた土地に、二世帯住宅を建築し、父母と岩崎さんの家族が住んでいました。住宅は山口さん名義、土地は父親名義になっていました。山口さんが不安を感じているのは、もし父親がなくなると、このままでは、遺産分割協議で父親名義の土地を分割せざるを得なくなるということでした。

Answer

今回のケースのように、近年二世帯住宅に住むご家族が多くなっていますが、親名義の土地に、子名義の住宅を建てることも多くなっています。

財産に現預金や有価証券など、流動性のある財産が少ない場合、どうしても土地などを売却、もしくは分割することになりますが、そこに居住する家族は、今までの生活を続けることができなくなってしまいます。

遺言書の作成

二世帯住宅に関連した土地などの財産を持つ方は、自分がいつ亡くなくても家族の暮らしが維持できるように、遺言書を書く必要があります。妻や同居の子に二世帯住宅の土地、建物を相続させることを明記し(例1)、別居の子には遺留分を満たす現預金や有価証券を相続させる方法が有効です。

(例1)遺言書

遺言者山口彬は平成◇年に長男山口一郎と協力して二世帯住宅を建築し、彬と妻雅子、長男一郎とその配偶者、孫二人とともに生活してきた。遺言者の死後も、現在の生活が維持できることを目的に以下を遺言する。

- 一、現在居住している×県◎市△町○番地の宅地(〇〇平方メートル)を妻雅子と長男一郎に2分の1ずつ相続させる。
- 二、家屋のうち遺言者の共有持分の2分の1を妻雅子に相続させる
- 三、△銀行△支店の定期預金(口座番号)全額を次男雅紀に相続させる
(後略)

また、相続時の準備としては、生命保険の活用もとても有効です。遺留分として現金が必要な場合、保障額の設定や保険種類などを相談しておかれたらよいと思います。

浜松に「知久屋」という惣菜・弁当の会社がある。そこでは、野菜は無農薬・低農薬で栽培されたオーガニック野菜。調味料も全て天然素材。また、製造工程では衛生管理・鮮度管理が徹底され、たんぱく質が変質しない低温殺菌・真空パックで商品を出している。仕入れから加工・調理・配送・販売までを一貫して行っている。

その社長と出会い、由布院はじめ九州のお話をしていたら、是非案内して欲しいとのリクエストがあり、先日福岡県岡垣町にあるスローリゾート「ぶどうの樹」に行ってきた。

「ぶどうの樹」って何？一口で言えない複合施設になっている。

「ゆかいな果樹園」と名づけられた大きな温室をブライダルやパーティー会場として使っており、天井には本物のぶどう棚に葉が茂りぶどうがなっている。隣にある「麦のキッチン」では、天然酵母パンとピザが焼かれ、地元産の農水産物が売られている。この全体施設の原点である「ぶどうの樹」では緑や花が咲くガーデンを眺めながらバーベキューはじめ食事を楽しめ、婚礼やパーティーもできる。さらに花緑水に囲まれた白亜のチャペルが用意されている。



さらに歩いていくとぶどうにちなんだ「ワインハウス」が、そしてスイーツが楽しめる喫茶が緑の中に建っている。三重県にあるもくもくファームの知恵を借りてつくったというソーセージ作り体験教室、他にも釜戸で炊くご飯を出す古民家風和食レストランもある。そして、この日泊まった離れ形式の宿泊施設「杜の七種」がある。

よくもここまでつくったものだ。

ここを経営するのが株式会社グラノ24K。グラノはスペイン語で「種、実」という意味。一つ一つの事業、スタッフを実にたとえ、24K（純金）のような本物の実を实らせることができる会社に、という願いを込めて名づけたと社長の小役丸さんは言う。

会社の目指すところは「私たちは地域とともに農業の6次産業化をめざします。」だ。

地域の農業や漁業ので出荷できない農水産物をうまくレストランと連携させ、地域に新しい経済を呼び込



んだことで注目されている。

安心安全を前提に、規格外の野菜であっても農家の言い値で引き取る。野菜をA B C Dの4ランクに分け、Aは市場に、Bは道の駅など直販場に、Cはレストランに、Dは加工品に向けられる。C Dに当たる規格外品は生産物全体の3割にあたり、これを引き取るのである。これまで全くお金にならなかったところか処分手間が必要だったものがお金になる。



農家はいいとしても、規格外品の食材使用や、食材ありきのメニューづくりに料理スタッフが抵抗した。しかし畑に足を運び、農作業を手伝っていくうちに、地元食材の種類と量にあわせたメニューづくりに共感し、地産地消の取り組みを理解するようになった。料理人は農水産業の現場を知ると変わる。

でも地元のを引き取るとなれば季節の偏りをどうする？夏には茄子ばかりが採れる。茄子を使ったいくつもの種類の料理を会席でというわけにはいかない。そこに出てきたのがビュッフェ方式。これならビュッフェ80種類の内、和風・洋風・中華風8種類が茄子の料理であってもいいのだ。

農家との関係が強くなってくると、野菜の収穫時期を各農家で調整してくれたり、これまで作ってこなかった農産物をつくるようになってきています。

この地産地消システムをささえるのが、食材が集められ加工し発送する工場「セントラルキッチン」があり、昼夜を隔てず動いている。

さらに株式会社グラノ24Kが経営する「鮭屋台」が「ぶどうの樹」から車で3分ほどの海側にある。海で働いてきた真っ黒いコンテナを利用して鮭屋としている。ここの予約がなかなか取れない、平日にも関わらず予約できた時間が11:30から、20席ほどのカウンター席は満席だった。ここのメニューは「海のおまかせ」2500円か3000円コースのみ。板前が船から直接買い付けするから、その日の漁におまかせ、水産版の地産地消である。



こうして、小倉と博多の間に位置し、こんなところに人がくるのかと思う農漁村地帯にある「ぶどうの樹」には、年間30万人の人が来て、売り上げ28億円をあげるまでになっている。